

様式4 令和2年度新座市学校評価システム 課題報告書

学校名	新座市立大和田小学校
実施日	令和3年1月19日

No.	質問項目	評価結果を踏まえた具体的な改善策		中間評価ポイント	評価 A/B/C/D
		中間評価	本評価	本評価ポイント	評価 A/B/C/D
1	私は、自己有用感の高い学校づくりに取り組んでいる。	<p>子供たちに目標を設定し達成に向けて努力させる指導は、進んでできている。全体的な指導に偏らず、個々の一人一人に合わせた見取りや指導を忘れずに「個の伸び」を認める指導を進めていく。コロナ禍ではあるが、学級活動の活性化や考える道徳の授業の展開を進めていく。</p>		3.22	B
		<p>教員一人一人が、児童の自己有用感を高めるための目標値を定めて、実施してきたことが高い評価となった。今後も、子供たちを一人一人ていねいに見とること、小さな成長を認めてほめ育てることを実践していく。コロナ禍が続く中、児童が可能な限りできることを実践し、取組ごとに目標をもたせること、ふりかえりを通して達成感を与えていく。</p>		3.41	A
2	私は、ゴール(身に付けさせたい力)を明確にし、主体的・協働的に課題解決を図る授業づくりに取り組んでいる。	<p>授業が終わった後にどういう力が身についているか、どんなまとめ(本時のゴール)にするかを考えたうえで、課題を作っていく。コロナ禍で制限されていた対話的・協働的な学びについても、飛沫防止ガードを活用して積極的にを行い、児童の考える力を伸ばしていく。</p>		3.11	B
		<p>全教科でゴール(身に付けさせたい力)を明確にし、授業実践に取り組んできた。課題に対してのまとめの正対すること、子供たちが深く考えることができる課題づくりを続けていく。国語科の研究を通して、児童自身が作るめあても定着し、徐々に主体的・協働的に学習に向かう姿勢が育ってきているので、他教科でも意識して取り組み、子供たちと共に作る授業づくりを進めていく。</p>		3.31	B
3	私は、児童の『自分から』を大事にした主体的・協働的な教育活動に取り組んでいる。	<p>「自分から」にはどんな規準があるのか、卒業までにどんな姿を育てるかイメージしていくことが必要である。言われたことができる子ではなく、言われる前に考えて行動できる子の育成を目指し、子供たちの主体性・協働性を育てていく。制限がある中で、それぞれの発達段階に合わせた活動を考えさせ、評価し、子供たちの自信を育てていく。</p>		3.14	B
		<p>例年できる活動ができないことが多い中で、可能な限り児童が活躍できる場を工夫して考えて実践させることに務めていた。児童の『自分から』という具体的な姿について、検討し、共有することができたので、身に付けさせる力として児童の主体性・協働性を育てていく。</p>		3.30	B
総 評					
		<p>・臨時休業を経て、感染症対策を踏まえて実践することの難しさがあった。特に児童たちが授業で交流する場面や活動する場面、体力向上の面でも制約が多かった。できる方法を考えて、実践を増やしていく。</p> <p>・学校のきまりや学年でのきまりなど様々なルールがあり、共通理解に基づく指導することの難しさがある。職員同士のコミュニケーションを通しての共通理解・共通行動を意識し、生徒指導部を中心とした指導体制を進めていく。同時に、子供たちの自主的な判断力をつけるためにも本当に必要かどうか、再検討していく。</p>			
		<p>・教育特区として取り組んできた外国語教育について、特に低学年が英語に触れる機会が減少し、子供たちの関心・意欲を高める必要がある。教室掲示や校内放送の一部として英語の歌を取り入れるなど、英語に触れる機会をつくる。また、高学年では教科となり教材研究・準備の負担が増えている。そのため、小学校外国語講師との打合せの時間の確保や連携を密にすることで、日々の指導力の向上が必要である。</p> <p>・体力の低下が心配され、また些細なことでのけがをする児童が多くなり、これまで学校全体で行われていた運動会・体育朝会などの活動について、学年単位、学級単位と細分化して実践してきた。今後も体を動かす機会を確保し、体力の向上に努めていく。</p> <p>・コロナ禍でできないと諦めるのではなく、安全を第一にした中でいかに工夫すればできるか、次年度も保護者・地域と連携し、実践していく。</p>			